F プロスポーツの定期的な試合開催と人々のスポーツライフ

筑波大学　体育系
准教授
仲澤　眞

はじめに

1988年、保健体育審議会は「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」の諮問を受け、その翌年「みるスポーツ」の重要性やプロスポーツの意義を明示する「画期的」（木村、2001）とも評される答申を行った。それ以降、「みるスポーツの振興」が国や自治体の具体的な政策課題となり（文部省競技スポーツ研究会、1996）、20年あまりが経過している。プロスポーツは、スポーツの文化性、公共性および公益性に配慮し、地域に根ざすことにより、スポーツの文化や地域におけるスポーツの発展に結びつき、また、地域の人々の共通の関心事を生み出し、地域活動の活性化につながるなどの期待を担うようになった。

本稿は、観戦型スポーツの定期的な開催と、周辺住民における「する」「みる」「ささえる」といったスポーツライフとの関係の把握を試みる。その手続きとして、プロスポーツの定期的な試合開催が地域住民に影響を及ぼす可能性がある種目に、年間開催試合数、使用されるスタジアム数および国民の年間直接観戦頻度をふまえ、プロ野球（NPB）とプロサッカー（Jリーグ）を取り上げた。当該2種目の定期的な試合開催のあるスタジアムと居住地との距離に基づき、調査対象を分類し（4分類および3分類）、施設の距離とスポーツライフの関係を分析した。分析の対象としたデータは、スポーツライフ・データの2014、2012、2010の各々を統合し作成した。わが国の成人を代表させるために、地区分類と人口規模により層化抽出された地点は、各調査において独立する210地点であり、3回分、延べ630地点から性・年齢に基づき抽出および収集されたサンプルのサイズは6,000であった。

F-1 調査対象の居住地とプロスポーツスタジアム

プロサッカースタジアムについては、10km未満に居住する人々は全体の26.9%、30km未満は全体の69.0%になっていた（**表F-1**）。プロ野球スタジアムについては、10km未満が全体の15.7%、30km未満が全体の48.7%になっていた。プロサッカースタジアムの施設数の多さがこの傾向の背景にあるものと思われる。プロサッカースタジアムあるいはプロ野球スタジアムのいずれかが、居住地の30km未満に位置している人々は全体の46.6%であった。

【表F-1】プロ野球（NPB）およびプロサッカー（Jリーグ）のホームスタジアムからの距離

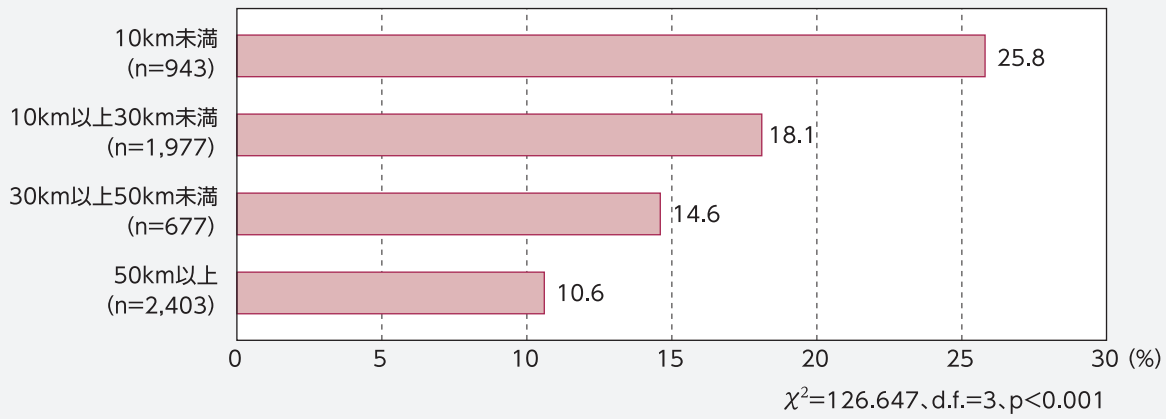
			プロサッカー（Jリーグ）ホームスタジアムからの距離				
			10km未満	10km以上30km未満	30km以上50km未満	50km以上	合　計
プロ野球（NPB）ホームスタジアムからの距離	10km未満	n	372	543	28	0	943
		%	6.2	9.1	0.5	0.0	15.7
	10km以上30km未満	n	735	1,140	102	0	1,977
		%	12.3	19.0	1.7	0.0	33.0
	30km以上50km未満	n	202	326	131	18	677
		%	3.4	5.4	2.2	0.3	11.3
	50km以上	n	302	516	425	1,160	2,403
		%	5.0	8.6	7.1	19.3	40.1
	合　計	n	1,611	2,525	686	1,178	6,000
		%	26.9	42.1	11.4	19.6	100.0

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2010、2012、2014）より作成

F-2 プロスポーツの定期的な試合開催とスポーツ観戦

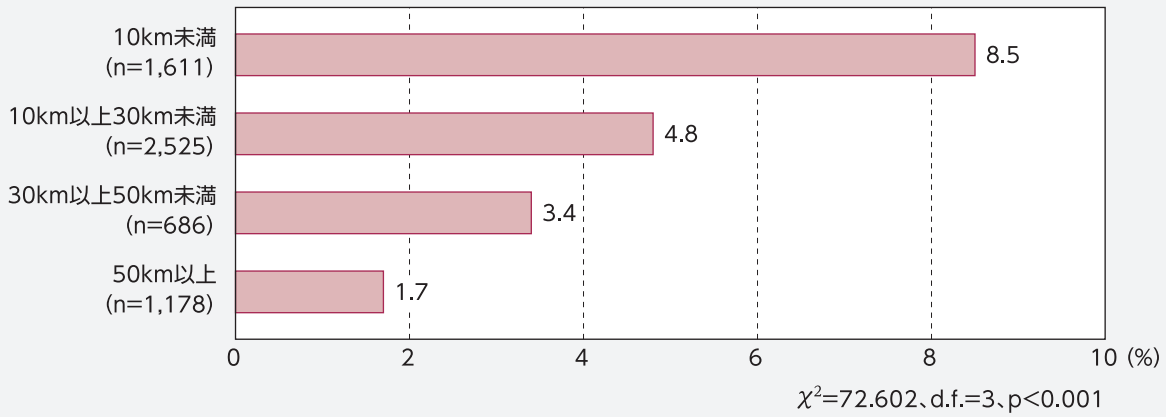
プロスポーツの定期的な試合開催とスポーツ観戦の関係については、居住地からプロ野球スタジアムへの距離が短いほど、プロ野球の直接観戦率（過去1年以内にスタジアムで直接観戦した人の占める割合）は高くなる傾向がみられた（**図F-1**）。特に、その距離が10km未満に居住する人々の観戦率が高かった。

プロサッカーにおいても、居住地からスタジアムへの距離が短いほど、プロサッカーの直接観戦率は高くなる傾向、その距離が10km未満に居住する人々の直接観戦率が特に高い傾向がみられた（**図F-2**）。



【図F-1】プロ野球（NPB）の直接観戦率（居住地とホームスタジアムとの距離別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2010、2012、2014）より作成

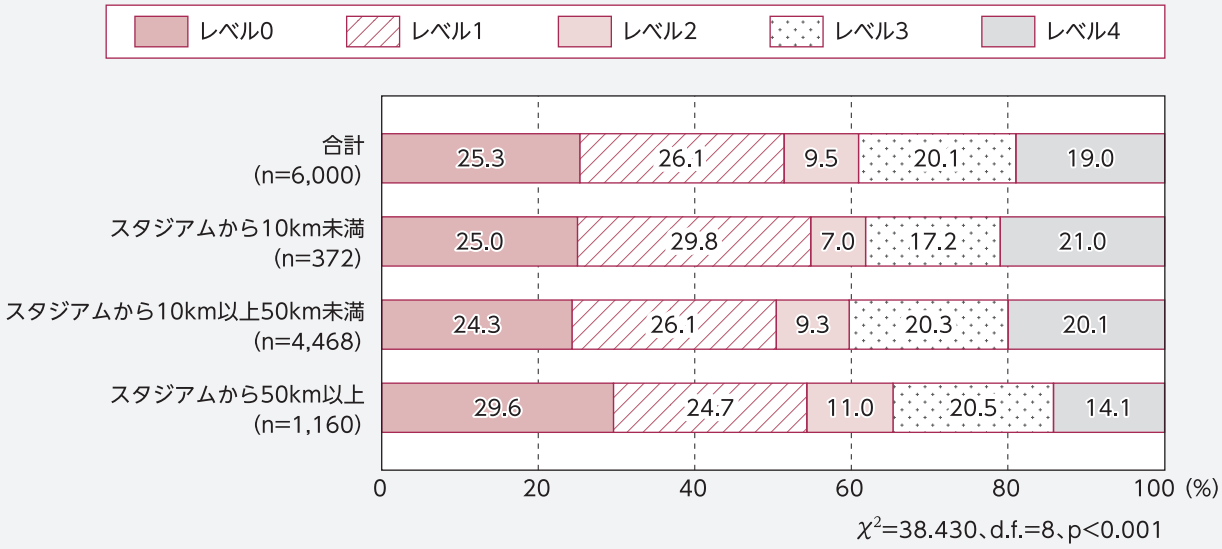


【図F-2】プロサッカー（Jリーグ）の直接観戦率（居住地とホームスタジアムとの距離別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2010、2012、2014）より作成

F-3 プロスポーツの定期的な試合開催と参加型スポーツ

居住地からプロスポーツが使用するスタジアムへの距離と、運動・スポーツ実施レベルからみた参加型スポーツ実施との関係においては、その関係に直線的なものを確認することはなかったが、居住地とスタジアムへの距離が50km以上の人々において「レベル0」の割合が高く、「レベル4」の割合が低い傾向がみられた（**図F-3**）。

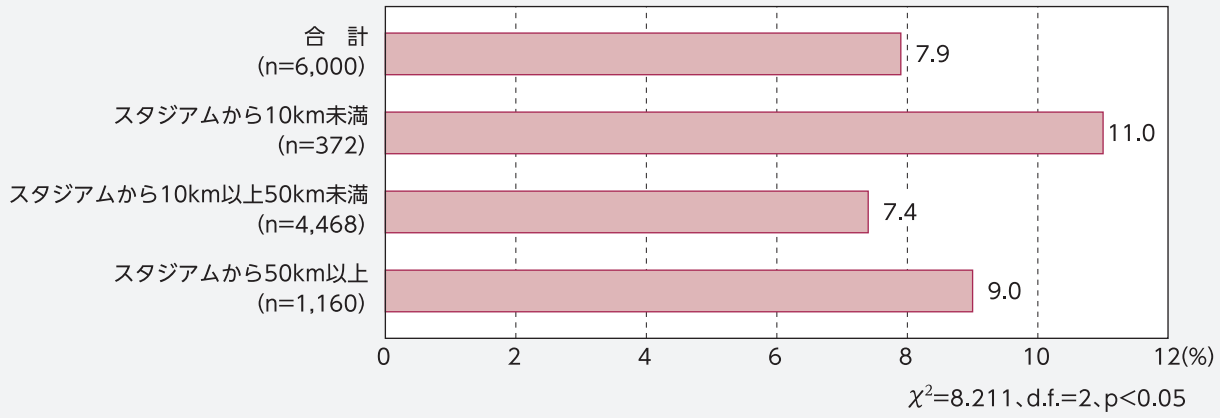


【図F-3】運動・スポーツ実施レベル（居住地とプロスポーツのスタジアムとの距離別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2010、2012、2014）より作成

F-4 プロスポーツの定期的な試合開催とささえるスポーツ

居住地からプロスポーツが使用するスタジアムへの距離とスポーツボランティア実施率との関係においては、スタジアムからの距離が10km未満の実施率が最も高く、50km以上の人々の実施率がそれに次いで高い傾向がみられた（**図F-4**）。ボランティア実施率にはスタジアムからの距離との間に直線的な関係はみられなかった。この関係の背景の説明には、介在する他の要因や、ボランティア活動の具体的な内容をも含めた分析が必要であり、それらは今後の課題となるが、本分析では10km未満の居住者のボランティア実施率が最も高く、10%を超えていることを確認した。



【図F-4】スポーツボランティア実施率（居住地とプロスポーツのホームスタジアムとの距離別）

資料：笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」（2010、2012、2014）より作成

まとめ

地域密着を標榜する日本のプロサッカーは、活動区域として都道府県を、そして加盟各クラブの定義に基づくホームタウンを設定している。このホームタウンを市区レベルでとらえれば、わが国の市区レベルの平均面積は約214.2㎢（国土交通省国土地理院、2013）であり、仮に中心にスタジアムを置き、円でこの面積を描いた場合、その半径は約8.26kmとなる。それは、今回の分析における距離分類では「スタジアムからの距離が10km未満」に相当するが、そのエリアにおいては、するスポーツ、みるスポーツ、ささえるスポーツのいずれもが、他のエリアよりも高い実施率を示していた。きわめてマクロなものではあるが、本分析は、プロスポーツの定期的な試合開催は周辺住民のスポーツライフの活性化と一定の関係を有すものであることを示唆した。

<参考文献>
木村吉次（編）　体育・スポーツ史概論．市村出版、2001.
文部省競技スポーツ研究会（編）「みるスポーツ」の振興．ベースボールマガジン社、1996.
国土交通省国土地理院　全国都道府県市区町村別面積調．2013.